

## 2008 年度 KUIS-CLS

### コロキウム・ワークショップ等報告

神田外語大学言語科学研究センター(KUIS-CLS)主催の言語学  
レクチャー (1 回)、言語学ワークショップ(1 回)、言語学コロ  
キウム (3 回)、言語教育レクチャー (2 回)、小学校英語特別  
セミナー(1 回)が以下のような日程、内容で開催されました。

#### <言語学関連>

##### (1) 言語学レクチャー

タイトル：ミニマリズムと日本語

講演者：宮川 繁氏 (MIT・教授)

会場：神田外語大学 3 号館 304 教室

日時とトピック：

1. 2008 年 4 月 16 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

Why Minimalism?

2. 2008 年 4 月 23 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

Optionality and Last Resort

3. 2008 年 5 月 7 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

Is There Such a Thing as a Language Without Agreement?

4. 2008 年 5 月 14 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

Is There Such a Thing as a Language Without Agreement?

5. 2008 年 6 月 11 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

Genitive Subjects in Altaic Languages

6. 2008 年 6 月 25 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

$\alpha$  P Projection (I)

7. 2008 年 7 月 2 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

$\alpha$  P Projection (II)

8. 2008 年 7 月 9 日 (水) 18 : 30 ~ 20 : 00

Syntax and Semantics of Ditransitive Verbs

## (2) 言語学コロキウム

日時：2008 年 6 月 4 日（水） 16：00～18：30

会場：神田外語大学 2 号館 203 教室

発表者：

- ・富岡 諭氏（デラウェア大学・准教授）

‘Why’ questions, Presuppositions, and Intervention Effects

要旨

It has been observed (e.g., Kuwabara, Miyagawa, Lee, Ko) that *naze/way* ‘why’ questions in Japanese and Korean do not manifest what have come to be known as Intervention Effects (IEs). I present a novel analysis of this phenomenon, based on the finer-grained judgment; the *why*^Intervener pattern is better than the other *Wh*^Intervener but still not as good as the Intervener^*why* order. This kind of gradient judgment cannot be easily dealt with the existing analyses, which are based on the ‘survival of the fittest’ principle. I argue that the improvement in *why* questions has its root in the presuppositional property unique to *why* questions. I will show that the *why* presupposition, coupled with the pragmatic account of IEs I advocated in my previous work, can successfully derive the judgment pattern. I also discuss the re-emergence of IEs with *why* questions under embedding (noted by Ko). Although I cannot provide a full-fledged analysis of this puzzling phenomenon, I will present new data that suggest that the re-emergence is not due to the syntax of embedding (contra Ko) but presuppositional consequences in embedded contexts.

- ・ Kyle Johnson 氏 (マサチューセッツ大学 アマースト校・教授)  
Fitting a Multidominant Model of Movement to  
Reconstruction Effects

#### 要旨

The focus of this talk will be on current explanations of the so-called “reconstruction” effects invoked by syntactic movement operations. When movement shows reconstruction effects, the phrase that moves behaves in some respects as if it has been semantically interpreted in its pre-moved position. Different movement operations give rise to different effects, and it matters also what the syntactic form of the moved phrase is. I will sketch a popular method of achieving these effects that characterizes movement as involving an operation that produces copies of the moved item. While this looks like a necessary ingredient to any successful account of reconstruction effects, it overgenerates. I will explore a solution to the problem of overgeneration that involves reinterpreting “copies” as one phrase assigned more than one position in a phrase-marker. This requires that phrase markers permit multidominance: one node may have more than one mother. I’ll introduce a way of linearizing these phrase markers that solves some of the problems we look at.

### (3) 理論言語学・日本語学ワークショップ

『統語構造と文の機能 (Force) : 項構造・命題を超えて』

日時 : 2008 年 7 月 26 日 (土) 10 : 20 ~ 17 : 00

2008 年 7 月 27 日 (日) 10 : 30 ~ 17 : 00

会場 : 神田外語学院 3 号館 7 階 プラザ・アズール

プログラム：

7月26日（土）

- ・長谷川 信子氏（神田外語大学・教授）  
ワークショップの趣旨  
CP 構造：現代日本語の「係り結び的」現象から
- ・富岡 諭氏（デラウェア大学・准教授）  
対照の主題と発話行為
- ・野田 尚史氏（大阪府立大学・教授）  
日本語の主文現象と従属節現象
- ・佐野 まさき氏（立命館大学・教授）  
とりたて詞と Agreement / Chain
- ・眞鍋 雅子氏  
（神田外語大学 言語科学研究センター・非常勤研究員）  
Xナラの構造と意味

7月27日（日）

- ・遠藤 喜雄氏（神田外語大学・教授）  
統語構造地図における情報構造と局所性
- ・北川 善久氏（インディアナ大学・准教授）  
Wh 疑問文における主文現象
- ・森山 卓郎氏（京都教育大学・教授）  
モダリティの体系について
- ・藤巻 一真氏  
（神田外語大学 言語科学研究センター・非常勤研究員）  
日本語の主語位置のイディオムからの検証

## 各発表の要旨

7月26日（土）

- ・長谷川 信子（神田外語大学・教授）

### ワークショップの趣旨

このワークショップは、2007年度から3年間の予定で発足した科学研究費補助金（基盤研究（B））によるプロジェクト（『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』研究代表者：長谷川信子）の一環として企画されており、2007年9月、2008年1月に続いて3回目となります。以下がこのプロジェクトの趣旨ですが、この研究を通して、統語理論の研究者と日本語学の研究者との活発な意見交換が行われることも期待しており、各ワークショップでは、その両分野からの研究者に発表をお願いしています。

GB理論など、文の命題的意味と構造を中心課題としてきたこれまでの統語理論では扱い切れなかった「語用的機能と統語構造との関係」に関わる現象を考察し、特に、そうした現象が豊富でかつ特徴的に現れる日本語の現象を中心的に考察し、日本語の統語論から統語理論一般への貢献を目指します。これまで統語理論では系統的に扱われることの少なかった、モダリティや終助詞、「疑問」「命令」等の語用機能を担う活用要素、また、文法関係を超えた意味を担う「取り立て詞」や副助詞、係り助詞などに、統語理論の観点からも積極的に焦点をあてた研究が進むことを期待しています。

演題「CP構造：現代日本語の「係り結び的」現象から」  
国語学の観点からは「係り結び」は、ハ、ゾ、コソなどの係助詞を持つ要素と活用（終止、連体、已然形など）との呼応現象を指し、古文では観察されるが現代

語では衰退したとされるが、本論文では、現代語にも観察される、特定の文中要素の生起とそれと呼応する述語の形態や要素の関係を「係り結び的」現象とし、それらを司るのが機能範疇であり、特に、主文の CP 構造と関係すると考えると捉えられる現象を考察する。その際、機能範疇についての理論言語学の知見、つまり、機能範疇と関わりは主要部<もしくは>指定部で明示される、から、一見「呼応が見られない」ような現象であっても、CP の構造と機能の観点からは、「係り結び的現象」として扱うことの利点を論じたい。空主語現象、条件節のタイプ、提示文など、を扱う予定である。

・ 富岡 諭（デラウェア大学・准教授）

演題「対照の主題と発話行為」

主題の「は」が対照の意味を持ちうることはよく知られているが、それがいわゆる情報の「不完全さ」「不確実性」「部分性」と言った効果にどうつながっていくかに関しては未だ解明されていない部分が多い。今回の発表では、対照の「は」を発話行為の対照と捉えることにより、特別な前提 (presupposition) や含意 (implicature) などの必要性はなくなるという点を指摘し、様々な発話行為のタイプの文（叙述文、疑問文、命令文など）にみられる対照の「は」の分析や、取り立ての表現 (focus) との関連、また従属文内の対照の「は」の使用などを取り上げる。

・ 野田 尚史氏（大阪府立大学・教授）

演題「日本語の主文現象と従属節現象」

日本語には主文だけに見られる文法現象がある一方、従属節だけに見られる文法現象もあります。たとえば、主題を表す「は」は、「山田は来た。」のように

主文には現れますが、「\*山田は来たら、伝えて」のように従属節には現れません。逆に、「子犬を連れた」のような形は、「子犬を連れた人」のように従属節には現れますが、「\*あの人の子犬を連れた。」のように主文には現れません。

この発表では、主文だけに見られる文法現象を命題を越えたもの、従属節だけに見られる文法現象を命題内のものと位置づけ、それぞれどんな文法現象があるかを広く観察します。具体的には、ヴォイス、アスペクト、テンス、モダリティ、とりたて、主題、敬語、副詞的成分などを取り上げます。

さらに、従属節内の要素が主文と呼応するような現象や、主文のように見えながら従属節のような働きをする文など、単純には解決できない問題についても検討します。

・佐野 まさき氏（立命館大学・教授）

演題「とりたて詞と Agreement / Chain」

とりたて詞と、それと呼応する節尾の認可子との関係は、一般に複合名詞句制約のような局所条件に従う。例えば「花子は[太郎が女子学生とお茶こそ飲む{の/?\*様子}]を見たけれども、お酒を飲む{の/様子}は見なかった」において、「譲歩のコソ」と、それと呼応するケレドモとの間の認可関係は、語彙的名詞「様子」を主要部とする複合名詞句によって成立が困難になっている。ところが、問題のとりたて詞と対になって解釈できるような別のとりたて詞が、問題の認可関係を持ち、局所条件の効果を消滅させることがある。「花子は[太郎が女子学生とお茶こそ飲む{の/様子}]は見たけれども、お酒を飲む{の/様子}は見なかった」に見られる下線部のハである。似たような「取り持ち関係」は、

「友人 {にまで/\*までに} 迷惑をかけた」に見られる  
「とりたて詞＋格助詞」の語順の不自然さが、「友人  
{にまで/までに}も迷惑をかけた」のようにモによって  
改善される現象にも見られる。本発表では、このような  
「とりたて詞＋とりたて詞＋認可子」のような関係  
が、生成文法の Agree や Chain といった概念でどのよ  
うに捉えられるかを考察する。

・眞鍋 雅子氏

(神田外語大学 言語科学研究センター・非常勤研究員)

演題「Xナラの構造と意味」

日本語学の考察では、ナラはそれに先行する構造的要素が文の場合（文ナラ）と体言の場合（体言ナラ）とで、異なるナラとして扱われることが一般的である。しかし本稿では、体言ナラも文ナラと区別せず、同様に扱うことが望ましいことを以下の観点から論じる。  
(i) 文ナラの持つ「仮定」と「前提」の機能を体言ナラも持つこと、(ii) 体言ナラと主題のハとは異なること、(iii) 「仮定」の機能を持つナラがとる文の階層構造は、体言ナラ・文ナラともに、主題のハがとる構造とは異なること、以上3点に言及して体言ナラと文ナラは統一的に扱うべきであることを論じる。(iii)については、主文現象に関わるナラ(条件)とハ(主題)の境界に関わる問題が、記述的な日本語研究の知見と最近の統語論における理論的研究の取組みの連携により構造的に説明できるのではないかと考える。

7月27日（日）

・遠藤 喜雄氏（神田外語大学・教授）

演題「統語構造地図における情報構造と局所性」

本発表では、Guglielmo Cinque と Luigi Rizzi によって  
共同で開始され、現在ヨーロッパを中心に開発中の統



語構造地図 (cartography of syntactic structures) を作製するプロジェクトを考察する。まず、このプロジェクトの概要を見た後で、主題 (topic) や焦点 (focus) といった情報構造が、どのように統語構造において表示されるかを紹介する。次に、統語構造地図を作製する作業において、鏡像原理 (mirror principle) と局所性の原理 (locality principle) が重要な役割を演じることを見る。最後に、これらを踏まえて、局所性の原理のなかでも相対最小性 (relativized minimality) の原理を用いて、逆行束縛 (backward binding) の現象を「かき料理は広島が本場だ」構文を中心に比較統語論 (comparative syntax) の観点から議論する (この構文については、野田尚史 1996 を参照)。さらに、時間が許せば、所有表現に関わる現象も検討する。

・北川 善久氏 (インディアナ大学・准教授)

演題「Wh 疑問文における主文現象」

複数の東京方言の話者の発音による Wh 疑問文を音声的に分析して、Wh 語のピッチが直接疑問文と間接疑問文では一貫して異なることが判明した。この発表では、このような実験結果を報告し、そこで確認された音声の差が、はたして一貫した意味的な差と連動したものであるか、そうであるとしたら、それはどのような差であるかを探る。特に注目するのは、(1)にみられるような直接疑問文と間接疑問文の解釈に関する非対称性で、

- (1) a. [CP 誰が参加するか] だいたいわかっています。  
b. 三年生はだいたい参加します。  
c. #誰がだいたい参加しますか?  
(だいたい = most members of 誰)

Berman (1991), Lahiri (2002), Beck and Sharvit (2002)らが議論してきた、英語などにみられる Quantificational Variability Effects と関連する。

References:

Beck, Sigrid and Yael Sharvit (2002) "Pluralities of Questions," *Journal of Semantics*, 19.105-157.

Berman, Steve (1991) *The Semantics of Open Sentences*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts at Amherst.

Lahiri, Utpal (2002) *Questions and Answers in Embedded Contexts*, Oxford University Press, Oxford.

・ 森山 卓郎氏（京都教育大学・教授）

演題「モダリティの体系について」

日本語のモダリティの体系は、「活用」も含めた形態との関連、テンスとの関連、節構造との関連、語用論的な「表現効果」との関連、そして、韻律特性などの音声面との関連といった多様な観点から分析する必要があると思われます。その枠組みを考えてみたいと思います。

・ 藤巻 一真氏

（神田外語大学 言語科学研究センター・非常勤研究員）

演題「日本語の主語位置のイディオムからの検証」

日本語のガ格主語の位置に関しては、これまでも様々な分析がなされてきた。たとえば、(i)ガ格は主格の抽象格で IP/TP の指定部にて屈折辞(INFL)から付与する；(ii)ガ格は IP 指定部に付与される default 格である；(iii)ガ格は、VP 内(vP 内)に存在し IP まで上昇していない；(iv)ガ格は、CP、IP、vP のどの指定部でも付与可能、など。これに関して本発表では、上記のよう

な主張の理論的な考察をふまえた上で、慣用句の固定性に基づき、固定性の高い慣用句の受動文の振る舞いを考察することで、少なくとも (LF を想定した場合でも) ガ格主語が元位置 (VP 補部) に残らなければならないことを結論づける現象が見られることを指摘し、ガ格主語の位置について (iii) が支持できることを示す。その理論的波及についても触れたい。

#### (4) 言語学コロキウム

日時：2008 年 7 月 29 日 (火) 16:00~17:30

会場：神田外語大学 2 号館 302 教室

講師：Juan Uriagereka 氏 (メリーランド大学・教授)

演題：Where Does the Recursive Buck Stop?

要旨：

How far down into the fabric of language does recursion go? Compounds are a natural domain to pose this question, particularly within a Bare Phrase-Structure (BPS) approach to syntactic relations. The syntactic structure of compounds of the 'pick-pocket' sort is quite reasonably of the standard (head, complement) form, which one starts derivations with in syntax. But most other compounds, like the familiar 'black-bird', seem considerably more elusive in this regard. They appear to involve a notion 'head' as originally discussed in Di Sciullo and Williams (1987), but at the same time it is hard to see exactly how that notion can be formally characterized within BPS parameters. Moreover, in deciding how to proceed, it may be important to review arguments, one way or the other, for whether these sorts of constructions are productive, systematic and transparent (the hallmarks of syntax). This is research in

progress, which ought to be of interest regardless of what we find the best answer to these questions happen to be. The goal is to address some foundations of syntactic structuring and whether they extend to the morphological domain -and if so, to what extent.

## (5) 言語学コロキウム

日時：2008 年 10 月 15 日（水）17：30～19：00

会場：神田外語大学 2 号館 203 教室

講師：Julia Horvath 氏（テルアビブ大学・教授）

演題：Syntax and the Lexicon: Morphological Causatives on a Comparative Perspective (Tal Siloni 氏との共同研究)

要旨：

The talk argues that verbal alternations that broadly speaking involve the cognitive notion of Causation result from two distinct generative mechanisms: (i) causativization, and (ii) decausativization. The latter operation is identical across languages and applies universally in the lexicon. The former exhibits cross-linguistic variation that follows straightforwardly if in some languages the operation is lexical, while in others causatives involve a biclausal syntactic structure comprising a Cause predicate and an embedded one. The study reveals and derives the various clusters of properties associated with the alternations, and formulates the precise mechanisms underlying them. Furthermore, it provides new evidence that contrary to some currently prevalent models, the lexicon must be an active component, where valence changing operations can apply.

## ＜言語教育学関連＞

(1) 言語教育レクチャー

日時：2008年9月16日（火）18:30～20:00

会場：神田外語大学3号館 3-106

講師：Tony Green 氏

(Principal lecturer at University of Bedfordshire, UK)

演題：No 'can do'? Relating English learning, teaching and assessment to the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR)

要旨：

This talk will discuss the increasing pressure on educators worldwide to relate local programmes to external frameworks such as the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) and some of the many challenges that this involves. Projects to link tests to the CEFR have been carried out or are underway for a number of tests that are widely used in Japan including the Eiken suite, TOEIC and IELTS. The talk will explore some of the issues involved in communicating outcomes through can-do statements and will describe the approach being taken by the ongoing English Profile research programme involving the University of Cambridge, The University of Bedfordshire, The British Council and English UK.

The talk will appeal to anyone interested in language learning and assessment and in communicating the outcomes of language learning.

教育関係者は、それぞれの地域で行っている語学プログラムをヨーロッパ共通参照枠（CEFR）に代表されるような外部枠組みと関連づけることが期待され、その過程で生まれる多くの問題への対応も迫られている。日本でも、英検、TOEIC、

IELTS など広く受験されている様々なテストを CEFR などの参照枠と結びつけようとするプロジェクトが進行中である。本レクチャーでは、Can-do リストを用いてテスト結果を解釈することに関わる諸問題を探る。さらに、ケンブリッジ大学、ベッドフォードシャー大学、ブリティッシュ・カウンシル、English UK が、現在共同で行っている English Profile 研究プロジェクトにおいて採用されているアプローチについて説明する。

今回紹介する内容は、言語学習、言語評価、さらには、言語学習の成果を解釈することに関心のある人にとって非常に興味深いものである。

## (2) 言語教育レクチャー

日時：2008 年 12 月 3 日（水）18:30～20:00

会場：神田外語大学 3 号館 3 - 301

講師：Tess Fitzpatrick 氏 (Lecturer at Swansea University, UK)

演題：Using word association responses to explore the nature of vocabulary knowledge

要旨：

This talk presents findings from a series of studies which attempt to address some of the problematic aspects of conventional research into word association behaviour. We see that L1 and L2 responses do differ, but in very specific ways, and we see that L1 response behaviour is not homogeneous, but varies considerably from one individual to another. However, within-subject analysis indicates that individuals are consistent in their own response behaviour (in other words, they tend to produce the same sort of responses) regardless of whether they are operating in their L1 or L2.

In the light of these findings, we suggest that attempts to use word association tasks to assess L2 proficiency have disadvantaged previous research, because this has necessitated the use of group data “norms”. This talk proposes that while word association research might not give us an easy route into proficiency measures, it does have the potential to help us understand the very nature of vocabulary knowledge.

本講演では、伝統的な語彙連想研究の問題点を解明するために行った一連の研究の成果を報告する。母語と目標言語とは、語彙連想のパターンは異なっているが、その違いにはある特徴がある。母語での語彙連想のパターンは、母語話者全員に共通なものではなく、個人差が大きい。それに対し、個人に焦点を当てると、各個人の語彙連想のパターンは、母語・目標言語を問わず、かなり一貫していることがわかった。つまり、いずれの言語であっても同様の連想をする傾向が見られた。これらの結果を考慮すると、語彙連想タスクを利用して習熟度を測定しようとする従来の研究は、集団準拠型であることが多く、再考を要するように思われる。語彙連想に関する研究は習熟度測定への近道を提供するものではないかもしれないが、語彙知識というものの本質を理解するための手がかりを与えてくれることを、提唱したい。

### (3) 小学校英語特別セミナー

「実りある小学校英語に向けて」

主催：神田外語大学、ブリティッシュ・カウンシル

日時および開催場所：2009年2月8日（日）／神田外語学院

プログラム：

基調講演 1 「めざそう、豊かな小学校の英語教育」

斎藤栄二 氏（京都外国語大学教授・京都  
教育大学名誉教授）

基調講演 2 “What makes a good primary English  
teacher? Strategies for success in  
teaching and training”

David Hayes (Brock University,  
Canada)

（「優れた小学校英語教員とは？ 指導と  
研修における成功への道」）

（デイヴィッド・ヘイズ 氏（ブロック大  
学・カナダ））

ワークショップ

「5年生向けコミュニケーション重視の活動」

シャンタール・ヘンミ 氏（ブリティッシ  
ュ・カウンシル）

「アクティビティを超えて —プロジェクト活動  
による小学校英語の展開—」

トム・レドブリ 氏&マーク・フィーリー 氏  
（ブリティッシュ・カウンシル）

「チャンツ集で英語力 UP! —指導者のための英語  
運用練習—」

宮本 弦 氏（神田外語大学）



「小学校『英語ノート（試作版）』における文字指導法とフォニックス」

杉山 みゆき 氏（神田外語キッズクラブ）

パネルディスカッション

「実りある小学校英語に向けて」

基調講演要旨：

斎藤栄二 氏（京都外国語大学教授・京都教育大学名誉教授）

演題「めざそう、豊かな小学校の英語教育」

現在小学校の外国語活動（英語活動）は、必修化を控えて大事な時に来ています。全国 550 の拠点校(英語活動等国際理解活動推進事業拠点校)の 5 年生・6 年生における『英語ノート(試作版)』の使用も活発化し始めています。義務教育の段階で、たとえ英語活動が教科にならないとしても、本格的に必修化されるのは、戦後の教育の歴史をとっただけでも初めてのことです。

この重要な時期にあたり、豊かな小学校英語教育のあり方を考え、将来への指針とすることは極めて重要だと思います。私はそれを次の 3 本の柱を中心として、皆さんと一緒に考えてみたいと思っています。

1. 英語教育を人工語の教育から脱出させる絶好の機会です。
2. 国際理解とは机について勉強させるものではなく、体験させるものという視点を持とう。
3. 英語教育を広い視点から考えて、平和な未来につなげて行こう。

David Hayes 氏（Brock University, Canada）

演題 “What makes a good primary English teacher?  
Strategies for success in teaching and training”

本講演は、小学校英語教員の英語運用能力、資質、指導技術、効果的な教員養成や研修など小学校英語教育・教員養成の重要な問題について専門能力開発の視点から議論する。

一般的に、小学校教員は日々、教室活動を実践し、子どもの認知的・精神的・肉体的発達についての知識が豊富である。子どもの発達段階に合わせた、さまざまな創造的教室活動や教材を開発することにも高い能力を持っている。しかしながら、通常科目に加え、外国語（英語）も指導することが求められている小学校教員は、自分自身に欠けているものに目を向けがちである。「語学力」である。せっかくのノウハウを語学力の欠如感のせいで活用できないことは、小学校への英語導入初期段階にある日本では、小学校英語の成功を妨げる危険性がある。日本の小学校教員は優れた指導技術をもっており、さらに、母語話者の教員にはできない重要な役割を果たすことができる。「優れた語学学習者」の模範として振舞うことである。児童の母語や文化を理解できることで、語学学習に適した環境を作り出すことが可能となり、また、英語とほかの科目とを関連づけることで、英語活動をより意味のある活動に変えることが可能となる。

成功する語学教育は、学習者自身の背景や状況に適したものであることが指摘されている。同様に、教員養成や研修も、背景や状況に適したものであることが、効果をあげることができるか否かにつながると考えられる。すでに教壇に立っている教師には、自分がすでに持っている能力を活かした英語教育のための研修が必要であり、これから小学校英語教員になろうとしている教師にとっては、小学生指導に適した知識や技術を身につける必要がある。忘れてはならないことは、日本の小学校英語教育に必要なことを、教員養成や研修で行わなければなら

ないということである。

本講演では、教師や教員養成・研修に関わるものが、日本の小学生が楽しい外国語（英語）活動が行うためには、どのような教室活動が必要なのかを考える機会を提供する。そして、それは子どもたちにとって学校生活の基礎になるものでもある。

#### ワークショップ要旨

シャンタール・ヘンミ 氏（ブリティッシュ・カウンシル）

##### 演題「5年生向けコミュニケーション重視の活動」

このセッションでは、5年生児童が楽しくコミュニケーション重視の活動をしながら、食べ物に関する語彙を学習する方法を紹介します。児童数30名から40名の教室活動を想定し、フラッシュカードを使ったドリル形式の活動を意味のある活動にする方法、学習した語彙をインフォメーション・ギャップのある活動の中で練習する方法などを紹介します。このワークショップでは、文科省が作成した『英語ノート(試作版)』を視野に入れながら、児童のやる気を引き出し、コミュニケーションを重視する活動を検討します。

トム・レドブリ 氏 & マーク・フィーリー 氏（ブリティッシュ・カウンシル）

##### 演題「アクティビティを超えて—プロジェクト活動による小学校英語の展開—」

2011年から、全国の小学校5・6年で英語が必修化されることとなり、小学校教員の間で、授業で使えるスピーキング活動に対する要望が高まっている。このセッションでは、様々なプロジェクト活動を紹介し、それぞれの学校に合ったカリキュラムの開発を提案する。

宮本 弦 氏 (神田外語大学)

演題「チャンツ集で英語力 UP! —指導者のための英語運用練習—」

このセッションでは、市販のチャンツ集を使って、皆さんと一緒にリズム活動を楽しみながら、小学校英語活動指導者のための発音トレーニングの理論と方法を紹介し、ワークショップから帰ってすぐに練習を始めることができるよう、教材の選び方と実際の練習の手順を具体的に紹介し、絵本などの教材を使った発展的な練習へと話を進めます。このようにして、教室での授業に直結する素材を使いながら「発音」についての不安を解消することが狙いです。

杉山 みゆき 氏 (神田外語キッズクラブ)

演題「小学校『英語ノート (試作版)』における文字指導法とフォニックス」

いよいよ小学校での英語指導が全国的に始まろうとしています。今年、試作版として作られた『英語ノート』には文字指導への導入的活動が盛り込まれています。小学校での楽しいアクティビティを通しての会話中心学習と中学での文字中心学習との落差につまずき、やる気を失ってしまう子どもは少なくありません。文字は人類の発明品であり、訓練なくしては習得は望めません。小学校であるからこそできる楽しい活動を通して、文字に対する抵抗感をなくし、中学での文字指導に自信を持って向き合えるための授業展開の具体的方法とともに、中学でも取り入れられている児童向け読み書き指導法であるフォニックスの基本的指導展開手順をご紹介します。

1. 小学校における文字指導の位置付けと具体的指導方法
2. フォニックスの基本的指導手順